

# リバーフロント整備センター 10年の歩み

## 設立の背景と目的

当センターは、水辺空間に関する技術開発および調査研究を総合的に実施し、かつ、その成果を幅広く社会に活用して、安全で豊かな潤いのある国土の建設に資することを目的として、国、地方公共団体、民間各界の御協力の下に昭和62年9月1日に建設大臣の許可を受け設立された。

設立当時の背景として、河川と水辺を取りまく状況は、次のようであった。

### 多発する水害、土砂災害

最近の昭和61年、62年についても鹿児島、香川、鳥取や京都府南部の水害・土砂災害、小貝川、那珂川、綾瀬川、阿武隈川、吉田川等全国的に水害が発生した。

さらに、都市化の進展等により、河川の氾濫区域や土砂災害の危険区域に人口・資産が集中していることもあいまって水害・土砂災害による被害が年々増大する傾向にある。

### 増大する水辺環境への強い要望

河川および海岸は、その治水・利水機能等の増進によって生活領域、生産活動の拡大をもたらし、さらに、その環境を通して地域社会の生活、文化、歴史の形成、発展の重要な役割を果たすとともに、人々の情操を育んできた。

近年の都市化の進展等に伴って、水質の悪化、親水性の低下等河川環境等が著しく変化する中で、水辺空間はウォーターフロントの時代を反映し、水と緑の貴重なオープンスペースとして、また、都市景観やふるさとの景観として地域環境に果たす役割が、再評価されている。

以上の状況から、治水施設の整備を促進することと併せて水辺空間の保全・整備を図ることが重要な課題となりつつあり、さらに、地域の特色を活かしつつ、「まちづくり」と一体的に水辺空間の整備を進めていこうという各方面か

らの要請が強くなってきた。このため、国においては第7次治水事業5カ年計画（昭和62年度から平成3年度）の中で「うるおいとふれあいのある水辺環境の形成」を図ることを計画目標の一つとし、安全で潤いのある水辺空間の形成を図るため、昭和62年度から「高規格堤防整備事業」、「ふるさとの川モデル事業」及び「マイタウン・マイリバー整備事業」を創設し、事業がスタートした。

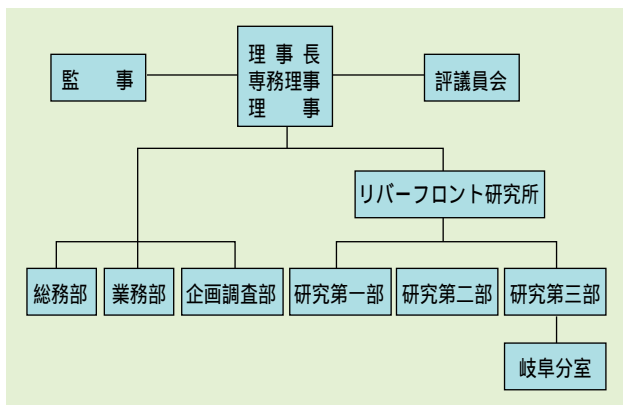
今後21世紀の高齢者社会に向けて、安全で豊かな住みよい社会を形成するためにも、水辺空間の整備が必要不可欠であり、水災害の防止、地域の環境水準の向上を図るため民間活力の活用も含め、水辺空間の整備に対する地方自治体等の要請に応じて積極的に事業を推進してゆき、水辺空間整備の技術的課題や事業実施上の政策システム等について総合的調査するための専門的調査研究機関の創設が是非とも必要であったところを受けセンターが設立された。

## 組織・体制

- (1) 名称 財団法人リバーフロント整備センター  
英 名 Technology Research Center for River front Development
- (2) 設立年月日 昭和62年9月1日
- (3) 組織の性格 民法第34条に規定する公益法人
- (4) 設立目的 水辺空間のあり方、水辺空間の保全と利用、水辺空間の整備等水辺空間に関する技術開発及び調査研究を総合的に実施し、その成果を幅広く社会に活用して、安全で、潤いのある国土の建設に資することを目的とする。
- (5) 事業内容 水辺空間のあり方に関する調査研究  
水辺空間の保全と利用に関する技術開発及び調査研究  
水辺空間の整備に関する技術開発及

び調査研究  
 水辺空間と地域とのかかわりに関する  
 調査研究  
 水辺空間に関する広報及び情報提供並  
 びに提言、指導及び企画立案  
 水辺空間に関する国際協力  
 前各号に関連する業務の受託  
 その他この法人の目的を達成するた  
 めに必要な事業

(6) 組織体制



センター設立と同時に研究第一部および研究第二部からなるリバーフロント研究所を設置し、また、事務局として総務部、業務部及び企画調査部を設置した。

研究第3部は平成5年4月に、岐阜分室は平成7年7月に設置した。

**役員** 平成9年8月1日現在、理事長を含め12名、監事2名計14名である。うち常勤は2名である。

**評議員** 現在35名である。

**職員** 設立当初は、常務役員を含め16名でスタートしたが、現在57名である。OB職員は136名となっている。

(7) 寄付金の受入状況

寄付金の受入状況としては、地方公共団体256団体（47都道府県、12政令指定都市、197市区町村）民間団体111団体の合計367団体で金額は11億1,391万円である。

**事業活動**

センターの事業活動としては水辺空間に関する調査研究・技術開発、広報・普及啓発、国際協力について実施している。以下昭和62年度から平成8年度までに実施してき



昭和63年6月17日評議員会



平成23年6月26日評議員会

た10年間の事業活動について概観する。

(1) 調査研究・技術開発

センターの設立目的である水辺空間に関する技術開発及び調査研究を総合的に実施し、安全で豊かな潤いのある国土の建設に資するため、これまでの10年間に実施してきた各種の事業課題を次のように分類した。

- 高規格堤防・超過洪水対策
- 流水保全水路・水質浄化対策
- ふるさとの川整備事業等
- 海岸・河口・港湾
- 地域開発・都市開発
- 多自然型川づくり
- その他

これらの水辺空間に関する調査研究は、河川、都市、景観、生態、地域計画、歴史・文化、環境、建築等広い分野にまたがるが多く、そして地域の特性を活かした水辺づくり等を目指すということで、検討にあたっては学識経験者、地域の有識者を交えた委員会方式を進めることを基本としている。成果物は、「リバーフロント研究所報告第1号～第8号（以下「研究報告」という。）」、まちと水辺に豊かな自然を ・ ・ ・ 、「川を楽しむ」、「ふるさとの川をつくる ・ ・ ・ 」、「RIVERFRONT」等で公表し

ている。以下事業課題別に述べる。

#### 1) 高規格堤防・超過洪水対策の調査研究・技術開発

大都市地域の大河川において計画高水位を上回る、又は恐れのある洪水、即ち超過洪水等に対して、破堤による壊滅的な被害を回避するため高規格堤防の整備を強力に推進することが昭和62年3月河川審議会から建設省に答申された。

昭和63年3月には利根川、荒川、多摩川、淀川及び大和川の各水系の工事实施基本計画が改訂され、高規格堤防設置区間として5水系6河川が決定された。

高規格堤防の整備にあたっての検討事項は、

高規格堤防の基本事項としては、高規格堤防の概念、高規格堤防の構造設計に必要な設計外力の考え方とその算出方法、越流水による洗掘破壊、浸透破壊等安全性等の技術的基準

高規格堤防と都市整備との関連事項としては、沿川の土地利用状況と開発計画情報、沿川地域の市街地整備動向と市街地整備の可能性、沿川整備構想と実現化方策（農地転用の手法も含む）、ケーススタディ地区の事業化と事業誘導方策等事業手法、費用負担、法制度

高規格堤防の施工技術事項としては、盛土材料の供給システム、盛土の許容残留沈下量、建設残土等盛土材料と地盤改良工法、近接施工法、施工管理等

のように多くの課題があり、これらについて調査研究を実施してきた。課題の中には中長期にまたがるものも多い。

これまでの調査研究成果は、「高規格堤防盛土設計・施工指針（案）」、「高規格堤防（スーパー堤防）整備の手引き」として取りまとめられ、高規格堤防の事業実施のための整備基本計画策定や高規格堤防の円滑な推進するための制度導入への参考資料として、またバックデータとして活用されている。制度導入の面では、河川法令の一部改正により高規格堤防の法的位置付け、設計水位の概念、構造の原則等が明確化され、誘導策として高規格堤防特別区域内の建築物に対する住宅金融公庫、日本開発銀行等の公的な融資が適用がなされている。建設省においての事業実施は、平成8年度には工事等実施が49地区、完了が24地区、計73地区という事業実施地区の拡大へと進展している状況である。

#### 2) 流水保全水路・水質浄化対策の調査研究・技術開発

流水保全水路は、本川の河道内に新たな低水路を整備し、本川の汚濁源となっている支川からの汚水や下水処理後の

排水を本川水から分離させ、広大な高水敷を活用した浄化施設の中を流下させることにより、これを浄化し、河川のもつ浄化機能と親水機能を増進させるとともに、主要な汚濁源の流入地点と主要な取水地点等の位置関係を改善することにより、水量、水質の総合的管理に資することを目的とし、検討事項は主として事業実施上の目標水量・水質の設定、流水保全水路の浄化手法、浄化施設の規模・構造、流水保全水路整備形態と費用効果、流水保全水路の親水施設、流水保全水路の維持管理等について調査研究を実施してきた。水質浄化対策については、水質浄化手法の調査研究、技術開発に努めてきた。個別には諏訪湖の浄化対策、平成5年に始まった清流ルネッサンス計画の立案、四万十川の清流保全方策等がある。水質の保全とともに水量の確保も重要な課題であり、流域水循環の回復や、正常流量のあり方に関するテーマにも取り組んでいる。水生生物による水質指標検討も行なっている。

#### 3) ふるさとの川整備事業等の調査研究・技術開発

ふるさとの川整備事業は、ふるさとの川モデル事業を母体とし、都市清流復活モデル事業、せせらぎふれあいモデル事業を平成6年に統合したものであり市町村のシンボリック河川において、周辺の景観や地域整備と一体になった河川改修を行い、良好な水辺空間の形成を図ることを目的とし、建設省において昭和62年度に創設された。ふるさとの川整備事業の実施については「実施要綱」の定めに基づくものであるが、水辺空間整備計画の策定に関する検討事項は

水辺空間整備の基本事項として、海外や国内の事例調査の収集と分析、まちづくりからみた水辺空間の役割・機能、水辺空間の整備手法、技術的手法、整備計画指針、水辺空間の保全と活用等

水辺空間整備の個別事項として、ふるさとの川整備指定河川の整備計画策定、マイタウン・マイリバー整備河川の指定の整備計画策定

等を実施してきた。

整備計画の策定にあたり、河川や地域社会の現況・特性から計画の策定基本方針を検討する場合、次のような区分で試行した。

- イ 周辺景観や生態系と調和した自然の姿を保全、復元すべき河川
- ロ 周辺景観と調和した人口美、機能美をつくりだすべき河川

## 八 河川空間の積極的利用を図るべき河川

### 二 無機質な河川景観を少しでもやわらげ、自然的イメージを持たせる河川

河川のもっているさまざまな特徴・性格から水辺空間の役割や機能をできるだけ生かした計画とするため、次のようなフレーズのいづれかを重視した整備計画を策定してきた。

- A 豊かな自然の保全と創出
- B まちの顔としての水辺の整備
- C 歴史と伝統の保全と継承
- D やすらぎとふれあいの水辺

初期のふるさとの川整備計画は、見た目が綺麗な川とか、はいからな川といった景観面と人々が水辺で遊び憩うための親水性が注目され、治水の安全に美しい景観と親水性のある川づくりが根底にあった。現在は水辺の生態系に着目し河川のダイナミズムを生かし多様性のある川づくりへと変化しつつある。昭和62年度から平成8年度までのふるさとの川指定は183河川、整備計画認定河川が164河川となっている。

整備計画の策定にあたっては、地域の意見やニーズをできるだけ計画に反映するため、指定河川地域の学識者、地元有識者、国・県・市町村の職員で構成された検討委員会を設置し、指導・助言を得た。検討委員会は10～20人で構成されているので、河川、地域計画、都市計画、環境、景観、造園、生態、歴史文化等の専門とする学識者は約500名を越える多数の参画を得た。

これら整備計画が認定された河川については、ふるさとの川整備計画の事例集としてまとめ「ふるさとの川をつくる・・・」を発刊している。

#### 4) 海辺の空間整備に関する調査研究・技術開発

海辺の空間整備については、高潮や侵食等の海岸災害から国土を保全するとともに、海辺と一体となった市街地の活性化、海岸保全対策の工法についての安全性と景観性、快適でうるおいのある沿岸域空間を創出と併せて建設発生土の有効利用を図る「人工バリア構想」、マリンスポーツ等の海洋性レクリエーションとして地域の自然や特性に応じた海浜空間の整備を図る「コースタル・コミュニティ・ゾーン(C・C・Z)整備」等を目的とし、検討項目は

海岸や河口の保全をベースに沿岸の海辺空間のあり方沿岸域の海岸保全と利用に寄与する人工バリアの構造海辺の養浜技術、マリンレジャーの導入施設、事業手

#### 法

安全性、景観上等の観点からの海岸保全対策の工法等の調査研究・技術開発を実施してきた。

C・C・Z整備計画は、建設省において昭和62年度に12カ所が始めて認定され、その後平成7年までに合計41カ所となり、これらの地域では、それぞれの特性を活かした整備がなされつつある。

海岸保全についても大切なテーマとして熱心に取り組んでいる。また沿岸域の管理のあり方については沿岸域生態系調査マニュアルの策定や海岸保全工法の検討を行った。

ミティゲーションの考え方をわが国の海岸保全事業に適用する場合の考え方の整理・評価の方法に関する調査研究を行っている。

#### 5) 都市と水辺に関する調査研究・技術開発

都市と水辺については、都市空間と水辺空間が融合した魅力的で個性豊かな都市づくり、大河川の沿川地域で都心部に近接した立地にある開発低地域について長期展望のもとで地域の特性を踏まえた川都市(リバーサイドタウン)構想、地域開発と水辺空間とが一体的に調和したまちづくり等を目的とし、検討項目は

海外・国内の事例収集、分析

大都市圏のウォーターフロント地域の住宅・都市整備手法

都市開発における水環境整備計画、親水施設のあり方都市と水辺と一体となった整備計画、実現方策、整備手法、事業手法等の調査研究・技術開発を実施してきた。

またニュータウン計画が実施される地域については、水循環を開発前の状態に近づけるための技術的な検討や、貴重な水辺となりうる防災調節池の平常時のあり方、また防災型まちづくりや緊急時を考慮した河川、水辺のあり方などについても調査研究を行ってきた。これらの研究成果は研究報告に掲載し、「ウォーターフロント開発と防災」を発刊している。

#### 6) 多自然型川づくりに関する調査研究

多自然型川づくりに関する調査研究については、河川が本来有している生物の良好な生育環境に配慮し、あわせて美しい自然景観を保全あるいは創出を目指す川づくりを目的とするが、このような多自然型川づくりは単なる自然保護ではなく、積極的に豊かな自然を再生しつつ水辺づくりを進めるという考え方を基調とするものである。検討項目は

海外・国内の事例収集、分析

水辺空間における動植物等の生息環境  
生態面からみた川づくり、河川工学面からみた川づくり

多自然型川づくりの河川整備目標  
多自然型川づくりの河川計画手法、設計・施工法、維持管理手法及び資器材の開発  
河道内樹木等のあり方

等の調査研究・技術開発を実施してきた。さらに生態的な観点から河川を理解し、川のあるべき姿を探ることを目的に委員会を設け、河川生態に関する学術的な研究を行っている。河道内樹木の取り扱いについては平成5年にガイドライン（案）を作成したが、引き続き治水上の機能への影響や環境上の役割を一体的にとらえ、今後の河川の計画・管理に資するべく調査研究を実施している。

魚がのぼりやすい川づくりについては、モデル河川について具体的な整備計画の策定を行ったほか、魚にやさしい落差工についての構造的な検討、魚類の遡上についての調査手法などの調査研究のほか、魚にとってすみやすい川づくりといった観点からの検討を行っている。これらの研究成果は研究報告に掲載し、多自然型川づくりの考え方や事例について紹介した「まちと水辺に豊かな自然を - 多自然型川づくりを考える - . . . 」を発売している。

#### 7) その他水辺空間に関する調査研究・技術開発

水辺について、水辺が安全で快適な魅力のある生活空間という観点から、水辺空間が持つ多様な機能・役割、都市における水辺空間の整備目標の基本的な計画を策定するためのガイドライン、河川内に設置されている親水施設について安全かつ快適な整備方法、水辺のシビックデザインについて景観計画、景観評価手法、水辺空間整備の情報収集・整理等の課題があり、検討項目は

水辺空間整備事例の海外・国内の収集・整理  
水辺空間の機能別の評価手法、機能別整備要求度合い、類型化等  
親水施設の整備方針、設計手法、管理瑕疵、水辺事故防止策  
水の役割の分類・比較、景観効果の体系化、河川景観評価項目  
河川舟運の検討

等の調査研究・技術開発を実施してきた。このうちリバーフロントの整備と保全、水辺空間整備手法に関する研究、親水施設の安全策について、河道内親水施設の設計に関す

る一考察、海外における水辺空間の整備等の論文は研究報告に掲載し、河川親水化と水辺事故防止調査研究は、その研究成果の一つとして水辺の事故を少しでも防ぐねらいとして制作したビデオ「着衣泳入門」は文部省選定になった。水辺事例の収集・整理してまとめ、水辺の持つ多様な魅力について紹介した「川を楽しむ」を発売している。

河川舟運についてはセンター設立以来、種々の観点から取り組んできた。カヌー、ボート等の遊びや趣味的な水面利用や舟運で栄えた歴史をもつ地域における河川整備のあり方、または、いわゆる不法係留船対策等を兼ねたマリーナ整備計画などがそのテーマである。最近では河川を地域交流や歴史文化の軸としてその活用を図り、地域振興にも寄与できるような構想づくり、あるいは物流の一端を河川にシフトさせることができないかといった観点から河川舟運の可能性を検討している。

#### (2) 広報・普及啓発

水辺空間に関する広報・普及啓発事業としては、シンポジウム・講演会・研究会等の開催、出版物、機関誌等の刊行、パンフレット等の作成、映画、ビデオ、スライドの制作、各種啓発活動等他の機関が行う事業への協力、水辺空間の保全整備に関する広報活動事業について実施してきた。主な実施内容は次の通りである。

については昭和63年に第1回のシンポジウムとして「いま水辺は甦る」をテーマにして行なったのを始めとし、平成4年からは「人と自然にやさしい川づくり」を標したシンポジウムやセミナーを毎年開催している。また沿岸域環境デザイン研究会をはじめとする各種研究会も実施している。

については水辺の文化誌「FRONT」、機関誌「RIVER FRONT」、単行本として「ふるさとの川をつくる ~ 」、「まちと水辺に豊かな自然を ~ 」、「魚道のはなし」、「魚道及び降下対策の知識と設計」、図鑑としての「Cyclopaedia川の生物図鑑」、「フィールド総合図鑑 川の生物」、河川水辺の国勢調査関連としての「マニュアル」3冊や「年鑑」5年度分等を発売している。技術報告書としての「リバーフロント研究所報告」や機関誌は国、地方公共団体、研究期間、当センターへ寄付された団体、検討委員会の学識経験者等へ配布している。又平成7年より「多自然研究」を毎月発行し、川づくりに対する情報交換の場を提供している。

については「高規格堤防」、「ふるさとの川整備事業」、

「コスタル・コミュニティゾーン整備事業」、「多自然型川づくり事例集」、等をはじめとする各種パンフレットを作成している。

については「人・水・都市」の映画、「ウォーターフロントは今」、「スーパー堤防」、「わたしたちと川・川で遊ぼう」、「瀬・淵の調査法」、「着衣泳入門」のビデオ、「日本の水辺空間」、「多自然型河川工法」、「環境に配慮して整備された河川空間」、「自然豊かな川づくり」、「まちと水辺に豊かな自然を」の 슬라이ド作成

については国・地方公共団体等が開催する水辺空間に関する研究会等（20数件／年）に講師・パネラーとして派遣し、また啓発活動への後援・協賛の協力

については（財）日本宝くじ協会の宝くじ助成事業により、一般の方々に水辺空間整備の効果・重要性和河川愛護精神の必要性に併せて宝くじ事業の公益性に関する理解を得ることを目的として、アメニティ・リバーフロント施設（記念碑・噴水等のモニュメント的な施設）を「カッパ像（佐賀市）」、「長衣の女（横手市）」、「ふれあいの泉（神戸市）」、「翠光すいこう（恵庭市）」等24カ所に設置、水辺のリバーガイド・ポスター・カレンダー等のパンフレット作成、水辺空間整備の事例集等を作成し国、地方公共団体、研究機関等に配布している。

#### （5）国際協力

水辺空間に関する国際協力としては、

海外の水辺空間整備の実情等を把握するため関係機関との意見交換や現地視察を行うため、昭和63年度にオーストラリア、平成元年度にアメリカ、平成2年度に欧州、平成3年度に北欧、平成4年度アメリカ・カナダ、平成5年度欧州、平成6年度欧州、平成9年度欧州の計8回、それぞれ視察団の派遣

水辺空間に関して海外の学識者等を招聘し講演や意見交換するため、ドイツのアーヘン工科大学教授で国際的な水工学の権威であるゲルハルト・ルーベ博士、同大学講師ヨルグ・ヘッテゲス氏、同大学エクハルト・リッター博士、国際的な河川水理学の権威でアメリカのアイオワ大学教授であったジョン・F・ケネディ博士（1991年に死亡）、ニューヨーク市都市計画部長のハリー・B・ホフ女史、スイスの多自然型河川工法を指導されているチューリッヒ州河川保護建設局のクリスチャン・ゲルディ課長、カナダの魚類生態学者サクスピク氏、スイス連邦工科大学マーチン・ジェッキ教授、フィンランドのアン・ライネ、テ

イモ・ボジャー、リタ・カムラ氏、ノルウェーのレイダー・ギレンデ氏、カナダのクリス・カトボディス氏、ドイツのエリック・パッシュ氏、アメリカ・オレゴン州立大学ピーター・C・クリンジマン博士、アメリカ地質調査所テリー・ワドル博士、ドイツ・バーテンヴェルテンベルク州のゲルト、クライバー所長等との交流

水辺とまちづくりに関連した国際会議又は発展途上国への技術協力として中華人民共和国、大韓民国、パキスタン、ネパール、シリア等への職員派遣や日中河川及びダム会議及び日韓河川及び水質源開発技術協力会議への参加

中華人民共和国の太湖の河川総合整備計画の策定について、当センター内に検討委員会を設置し調査検討の支援等を実施してきた。

台湾省水利局等の河川研修受け入れ及び同省への講師派遣などを行ってきた。

## 前5年間の年表

1986 87 SHOWA  
61・62

1988 SHOWA  
63

日付	記事
S61.12.5	第1回リバーフロント整備センター設立準備会開催。
S62.6.22	第2回リバーフロント整備センター設立準備会開催。財団法人リバーフロント整備センター設立準備室を財団法人国土開発技術センター内に設置。
7.24	第3回リバーフロント整備センター設立準備会開催。
30	財団法人リバーフロント整備センター設立発起人会開催（港区虎ノ門パストラル）。
9.1	建設大臣より設立の許可を受け、財団法人リバーフロント整備センター設立される。同日付で法務局へ法人登録。
10	昭和62年第1回理事会開催。
17	建設省より試験研究法人等の証明を受ける。
21	第1号受託業務契約（狩留賀海浜公園計画設計業務委託、広島県呉市）。
10.1	建設省より河川環境研究推進費補助の交付を受ける（変更後3000万円）。
8	昭和62年度第2回理事会開催。
8	設立披露パーティー（千代田区麹町会館）開催。
11.1	機関誌「RIVER FRONT」第1号発行。
11~12	半島振興シンポジウム（鹿児島県指宿市）に研究第一部長がパネリストとして出席。
12.10	昭和62年度「ふるさとの川モデル河川指定式」（建設省主催）に協力。
15	第1回水辺空間の整備に関する講演会（センター会議室）を開催。
S63.1.22	財団法人日本宝くじ協力より水辺空間に関する広報活動事業に対する助成決定を受ける（2500万円）。
27	第2回水辺空間の整備に関する講演会（センター会議室）を開催。
3.25	千葉県松戸市及び岐阜県岐阜市にアメニティー・リバーフロント施設を寄贈。

日付	記事
S63.4.7~7.27	第3~5回水辺空間の整備に関する講演会（センター会議室）を開催。
18	センターのシンボルマーク決定。
6.13	昭和63年度「ふるさとの川モデル河川指定式・整備計画認定式」、「マイタウン・マイリバー整備河川指定式」（建設省主催）に協力。
19	小田川シンポジウム（愛媛県五十崎町）において「水辺空間整備の方法と事例」について職員が講演し、「理想的な川づくりとは」と題したパネルディスカッションにコーディネーターとして研究第一部長が出席。
21~11.18	昭和63年度国際レジャー博覧会及びオーストラリア等建設事業視察団（第1~3班）、プリズベン、メルボルン、シドニー等7都市の水辺空間整備事情を視察し現地担当者との意見交換を行った。
30	初めての出版物「信濃川水紀行」を発行。
7.28~29	京都市環境衛生工学研究会・第10回シンポジウムにおいて専務理事が特別講演。
8.2	都市景観美・考シンポジウム「まちづくりと都市環境デザイン」（千代田区経団連会館）を開催。
9.6~8	「88とやま国際水シンポジウム」に後援し、研究第一部長が講師として出席。
29	建設大学校「都市行政科研修」に研究第二部長が講師として出席。
10.1	「FRONT 創刊号」を発刊。
4	ニューヨーク市ハリー・B・ホフ計画部長を招き設立1周年記念シンポジウム「いま水辺は甦る」- 都市の再生と水辺の未来 - を開催。
6~15	研究第二部長、中華人民共和国にJICA専門家として派遣（太湖の開発と管理について）。
31	日本沿岸域会議主催のシンポジウム「ウォーターフロントを考える」に、研究第一部長が講師として出席。
31	大分県稲葉川ふるさとの川モデル事業起工式に、理事が出席。
31~11.12	「第4回日中河川及びダム会議」に協力。
11.1~2	「第3回九州河川シンポジウム」に後援し、研究第一部長が司会として出席。
16	日本河川協会主催の「都市河川セミナー」に研究第二部長が講師として出席。
20	土木学会主催「水辺の景観設計講習会」に研究第一部長が講師として出席。
12.26	昭和63年度・第2回「ふるさとの川整備計画認定式」（建設省河川局主催）に協力。
H1.2.22	平成元年新春フォーラム「隅田川のリバーフロンティアを求めて」に後援し、研究第一部長がパネラーとして出席。
3.30	「世界のウォーターフロント」を刊行。

1989

HEISEI

1

1990

HEISEI

2

日付	記事
H1.4.9	生田川親水広場(愛称:ふれあい広場)竣工式に、理事が出席。
6.6	平成元年度「ふるさとの川モデル河川指定・整備計画認定式」(建設省河川局主催)に協力。
15	「ふるさとの川をつくる-ふるさとの川モデル事業整備計画事例集(1)」(当センター編集、建設省河川局監修)を(株)大成出版社から刊行。
17	(財)全国建設研修センター主催の「河川技術研修」に、研究第一部長が講師として出席。
7.2~16	国際沿岸域会議にて研究第二部長が論文発表。
27	「ラブリバー活動感謝式典」(建設省河川局主催)に協力。(財)河川環境管理財団とともに「ラブリバー活動交流講演会」を開催。
9.29~10.11	研究第二部長、パキスタンにJICA専門家として派遣(都市圏総合整備計画調査)。
9.29	建設省富山工事事務所主催の講習会「郷土の川を考える」に専務理事が講師として出席。
10.15~28	ニューヨーク・サンアントニオ等の水辺事情調査として「アメリカ・ウォーターフロント事情視察団」を派遣。
10.31	市町村職員中央研修所主催の研修会「魅力ある街づくり」に専務理事が講師として出席。
11.13~22	研究第一部長、大韓民国にJICA専門家として派遣(河川環境管理について)。
15~16	「第4回都市河川セミナー」において職員が研究発表。
12.13	建設省東北地方建設局主催の「河川計画研修会」に研究第一部長が講師として出席。
H2.1.31	建設省関東地方建設局主催の座談会「土木の夢スケッチブック」に職員がパネラーとして出席。
2.2	建設省庄内川工事事務所主催の講演会「自然を基調とした川づくり」に職員が講師として出席。
20	土木学会中国四国支部平成元年度第2回講習会「河川環境と街づくり」に研究第二部長が講師として出席。
21	沖縄の水研究会主催の講習会「沖縄の河川を考える」に研究第二部長が講師として出席。
23	北海道河川環境整備促進協議会主催の講演会「水辺の計画と設計」に研究第二部長が講師として出席。
3.5	「人権問題に関する講習会」を開催。
10	「まちと水辺に豊かな自然を」多自然型建設工法の理念と実際」(当センター編集)を(株)山海堂から刊行。
15	横手川(横手市)ブロンズ像(長衣の女)除幕式に理事が出席。
31	「ホタルのすめる環境づくり」小冊子を刊行。
31	「リバーフロント研究所報告第1号」の刊行。

日付	記事
H2.4.15	松原川(佐賀市)カップ像除幕式に理事が出席。
5.14	小田川(五十崎町)アユの像除幕式に理事が出席。
6.6	平成2年度建設省河川(上級)研修「多自然型河川工法について」に研究第二部長が講師として出席。
16	財団法人全国研修センター主催の河川技術研修に研究第一部長が講師として出席。
7.5	平成2年度「ふるさとの川モデル河川指定・整備計画認定及び桜づつみモデル事業認定式」(建設省河川局主催)に協力。
10	社団法人全日本建設技術協会主催の建設技術講習会に職員が講師として出席。
24	「ラブリバー活動感謝式典」(建設省河川局主催)に協力。
24	「ラブリバー活動交流講演会」を開催。
25~27	「国際水都首長会議」に後援するとともに、理事がサブコーディネータとして出席。
8.27	「柴川マイタウン・マイリバー整備事業・整備計画認定式」(建設省主催)に協力。
29	リバーフロントシンポジウム-多自然型河川工法を考える-を開催。
10.6~10	「国際魚道会議ぎふ'90」に協賛するとともに、職員が論文発表。
13~27	スイス・オーストリア・ドイツ等の多自然型河川工法調査として「欧州水辺空間整備事情視察団」を派遣。
17~18	「第6回日中河川及びダム会議」に協力。
25~27	「第5回都市河川セミナー」に職員が研究発表。
11.6	国土庁水質源部主催の「水辺空間整備の最近の動きについて」に研究第二部長が講師として出席。
20	「ウォーターフロント開発と防災」を刊行。
27	茨城県河川協会主催の茨城県水際線シンポジウムに研究第二部長が講師として出席。
28	建設大学校主催の専門課程河川計画科研修に研究第一部長が講師として出席。
H3.2.14	建設省中部地方建設局主催の講習会「自然豊かな川づくりについて」に研究第二部長が講師として出席。
16~25	ジョン・F・ケネディ博士をお招きして、京都市及び東京都において「アメリカ合衆国における河川行政と課題」講演会を開催。
24~3.7	研究第二部長、ネパール国にJICA専門家として派遣(カトマンズ都市交通計画調査)。
3.20	「川を楽しむ」(当センター編集)を技報堂出版から刊行。
20	山崎川(名古屋市)ブロンズ像(水と遊ぶ子供の像)除幕式に理事が出席。
30	「リバーフロント研究所報告第2号」を刊行。



## 後5年間の年度別にみた事業トピックス

# 1991 HEISEI 3

# 1992 HEISEI 4

日付	記事
H3.4.25	平成3年度「桜づみモデル事業認定式」(建設省河川局主催)に協力。
6.23~7.5	フィンランド・スウェーデン等の水辺空間整備事例調査として、「北欧水辺空間整備調査団」を派遣。
7.17	平成3年度「ふるさとの川モデル河川指定・整備計画認定式」(建設省河川局主催)に協力。
25	ドイツ・アーヘン工科大学 ゲルハルト・ルーベ教授らを招き、多自然型川づくり~人間生活と調和のとれた自然豊かな川づくり~のシンポジウムを開催。
26	徳島県主催の「とくしま水辺づくりシンポジウム'91」に研究第二部長がパネラーとして出席。
30	兵庫県主催の水辺空間整備研修会に研究第二部長が講師として出席。
9.3	福井県建設技術センター主催の研修会「河川環境設計について」に研究第二部長が講師として出席。
6	新潟県土木部河川課主催の講習会「河川環境設計について」研究第二部長が講師として出席。
19~28	「第7回日中河川及びダム会議」に前理事長が当センター代表として参加。
11.12	「第6回都市河川セミナー」に研究第二部長が研究発表。
12~21	研究第二部長、ネパール国へJICA専門家として派遣(カトマンズ都市計画調査)
19	アーヘン工科大学 エクハルト・リッターバーハ氏と「多自然型川づくりに関する意見交換会」を開催。
H4.1.13	「マイタウン・マイリバー整備事業河川指定・整備計画認定式」(建設省主催)に協力。
17	建設省建設大学校主催の研修会平成3年度専門過程河川計画研修に研究第一部長が講師として出席。
23~24	「ウォーターフロント開発シンポジウム」(土木学会主催)に理事長が記念講演及び協力。
29	「着衣泳入門~水辺の事故を防ぐために~」ビデオが文部省選定。
2.14	建設省北陸地方建設局主催の講習会「わが国における多自然型川づくりについて」に研究第二部長が講師として出席。
28	社団法人日本河川協会主催の講習会「第38回河川講習会」に研究第二部長が講師として出席。
3.5	「まちと水辺に豊かな自然を」~多自然型河づくりを考える~(当センター編集)を(株)山海堂から刊行。
27・29	河川フォーラム「川をつきあう」(建設省中部地方建設局主催)に協力。
31	「リバーフロント研究所報告第3号」を刊行。

### 「魚にやさしい川づくりをめざして」 講演会を開催

カナダにおいて長年にわたり魚道や魚類生息環境を研究されているサクスピク氏の来日を機会に、当センターと財団法人ダム水源地環境整備センターの共催で「魚にやさしい川づくりをめざして」と題した講演会を、豊橋技術科学大学の協力を得て平成4年7月22日に、財団法人ダム水源地環境整備センターにおいて開催した。

講演会は、サクスピク氏により「カナダの河川における魚類生息環境改善等について」をテーマに行われ、コメンテーターとして豊橋技術科学大学中村俊六教授が参加された。

### 「アメリカ・カナダ水辺空間整備調査団」派遣

アメリカ・カナダにおける水辺空間整備と魚類に対する生育環境等に関する調査を目的として、平成4年10月4日から10月17日までの14日間に渡り調査団を派遣した。調査団は、東京大学の玉井信行教授を団長とし、建設関係団体等から総勢29名の参加を得て、ナナイモ、バンクーバー、ポートランド、アイオワシティ、ボストン、ニューヨークの6都市で12機関を訪問するとともに各地で現地視察を行った。

調査の内容は、「アメリカ・カナダ水辺空間整備調査報告書(平成5年1月)」としてとりまとめられている。



### 「人と自然にやさしい川づくり」セミナー開催

「人と自然にやさしい川づくり」をテーマに、東京にお

いて平成4年11月30日から2日間にわたり開催し、約300名の参加者を得た。セミナーにおいては、生物の良好な生息環境に配慮し、美しい自然景観を保全あるいは創出する川づくりに関し、筑波大学椎貝博美教授、信州大学桜井善雄教授、東京大学篠原修教授など各分野の専門家による講演と、建設省、県の事務所による現地での適用事例の報告が行われた。



セミナーの内容は、「人と自然にやさしい川づくりセミナー講演集」としてとりまとめられている。

### 「ふるさとの川をつくる」ふるさとの川モデル事業整備計画事例集( )刊行

ふるさとの川モデル事業の概念や認定されたふるさとの川整備計画の事例を紹介した「ふるさとの川をつくる」を建設省河川局監修、当センター編集により、(株)大成出版社からA4版カラーとして平成4年12月25日に刊行した。

本書は、平成4年度に認定された整備計画の22河川について 豊かな自然の保全と創出 町の顔としての水辺 歴史と伝統の保全と継承 安らぎとふれあいの水辺の4つのパターンに分けて紹介するとともに、整備中の10河川について実施事例を紹介している。



### 「第一回高規格堤防セミナーの開催」

高規格堤防整備事業は、河川整備と都市整備等を併せた総合的な施策であり、諸制度の整備が図られてきているとはいえ、事業実施現場においては、試行錯誤を繰り返しながら事業の推進が図られている。このため、高規格堤防整備事業の実務者を対象として、実務的な情報を取得する機会を提供することを目的として、平成5年2月4日「高規格堤防概論」を主要テーマに超過洪水対策、高規格堤防の構造、事業の流れ等について第一回高規格堤防セミナーを実施した。

日付	記事
H4.4.28	平成4年度「桜づつみモデル事業認定式」(建設省河川局主催)に協力。
5.4~5	「ふるさとの川づくり・まちづくりを語る～全国ふるさとの川サミット～」(五十崎町主催)に後援及び、研究第一部職員が講師として出席。
17~23	第15回日韓河川及び水資源開発技術協力会議に協力。
6.2	平成4年度「なぎさリフレッシュ事業計画認定式」(建設省主催)に協力。
15	建設省建設大学校主催の平成4年度専門課程河川環境科研修「多自然型川づくり」について、研究第二部次長が講師として出席。
7.3	平成4年度「ふるさとの川モデル河川指定・整備計画認定式」(建設省河川局主催)に協力。
11	防賀川(京都府田辺町)ブロンズ像(夏の川)除幕式に理事長が出席。
14	建設省建設大学校主催の平成4年度高等課程公共土木企画調整科研修「水辺空間の展望」について、研究第二部次長が講師として出席。
22	カナダのサクスピク氏を招き、当センターと財団法人ダム水源環境整備センター主催の講演会「魚にやさしい川づくりをめざして」を豊橋技術科学大学の協力により開催。
23	「第321回建設技術講演会」((社)全日本建設技術協会主催)に研究第二部職員が講師として出席。
9.24	兵庫県主催の研究会「第2回美しい兵庫の水辺づくり研究会」に研究第二部職員が講師として出席。
25	センター5周年の集い。
10.1	「建設省土木研究所創立70周年記念事業」に協力。
4~18	バンクーバー・ポートランド・ボストン・ニューヨーク・アイオワシティの水辺空間調査として、玉井東京大学教授を団長とする「アメリカ・カナダ水辺空間整備調査団」を派遣。
5	「近自然工法国際環境フォーラム」(兵庫県実行委員会主催)に協賛。
5~14	「第8回日中河川及びダム会議」に協力。
7	「92国際水辺環境フォーラム」(豊田市主催)に協賛。
20~21	「全国なぎさシンポジウム・イン新潟」に協賛。
29	近畿大学理工学部土木工学科の特別講義「自然豊かな川づくりをめざして」に研究第二部次長が講師として出席。
11.10	社団法人日本河川協会主催の都市河川セミナーに研究第一部・研究第二部職員が講師として出席。
11	建設省建設大学校主催の平成4年度専門課程河川構造物設計科研修会に研究第二部次長が講師として出席。
19	熊本県・熊本市主催のシンポジウム「第7回九州河川シンポジウム」に後援及び、研究第一部長がコーディネーターとして出席。
20	埼玉県土木部河川課主催の多自然型工法講習会に企画調査部、研究第二部職員が講師として出席。
20	徳島県農林水産部・土木部主催のシンポジウム「自然環境の保全と創造に向けて」に研究第二部次長が講師として出席。
26	社団法人軽金属協会主催の講演会「海外のリバーフロントについて」に研究第一部職員が講師として出席。
27	岐阜県主催の「多自然型川づくりシンポジウム」に協賛及び、研究第二部次長、職員が講師として出席。
30	「人と自然にやさしい川づくり大賞」表彰式の開催。
30~12.1	「人と自然にやさしい川づくりセミナー」(建設省後援)開催。
12.5	神奈川県主催の平成4年度土木デザイン研修会に研究第二部次長が講師として出席。
9	土木学会中国四国支部主催の平成4年度第3回講習会に研究第二部次長が講師として出席。
14~8.31	建設省河川局主催の「水の環境・文化を考える懇談会」に協力。

18	建設省中部地方建設局主催の平成4年度設計・施工研修会に研究第二部長が講師として出席。
25	「ふるさとの川をつくる」～ふるさとの川モデル事業整備計画事例集( )～(当センター編集)を(株)大成出版社から刊行。
H5.1.12	水辺空間の保全整備に関する研究会「魚の目から見た河川環境」を開催。
27～29	社団法人全日本建設技術協会主催の第329回建設技術講習会に研究第二部長が講師として出席。
2.4	第1回高規格堤防セミナー開催。
5	水辺空間の保全整備に関する研究会「東京のグリーンベルト計画」を開催。
8	建設省建設大学校主催の平成4年度専門課程河川計画科研修会に研究第一部長が講師として出席。
24	北海道土木部技術研究会主催の第15回北海道土木部技術研究会(治水部会)に研究第二部長が講師として出席。
26	助任川(徳島市)セラミック壁画除幕式に理事が出席。
3.4	建設省中部地方建設局沼津工事事務所主催の公開講座「第2回富士・伊豆地域文化塾」に研究第二部長が講師として出席。
25	隅田川水系浄化対策連絡協議会主催の講演会「自然ゆたかな川づくりをめざして」に研究第二部長が出席。

いる。

本書は、平成2・3年度に実施された河川水辺の国勢調査の成果を広く公開し、一般の利用に供すべく、「河川空間利用実態調査編」「魚介類調査編」の2編を建設省河川局治水課監修、当センター編集により、(株)山海堂から刊行された。

### リバーフロント研究所報告第4号発行

リバーフロント研究所が昭和62年9月に設立されて以来、国民の生命と財産を守り育てて豊かな生物と美しい風土を育むという河川の望ましい姿の実現に向け調査研究を続けてきた。

その結果の一端として、平成元年(1989年)以来各年度毎に当センターの調査研究をとりまとめ、研究所報告を発行してきたが、今回第4号の出版となった。各号の論文の目次を見ても、河川やその水辺に対する時代の要請を敏感に反映していることが感じられる。



### 「河川環境保全シンポジウム～人と自然にやさしい川づくり」開催

建設省で平成5年度から「河川環境保全モニター制度」が発足したのを機会に建設省の後援のもと、「河川環境保全シンポジウム」と題して、平成5年7月8日に東京において開催した。

シンポジウムでは、関正和河川環境対策室長の講演「自然豊かな美しい川づくりをめざして」、国際日本文化研究センター森岡正博氏の基調講演「地域住民の意見を吸収する意思決定システム・モデルとは」の他、事例報告やパネルディスカッションが行われた。



### 「リバーフロント国際セミナー」開催

ヨーロッパにおける川づくりの専門家、研究者等を招いて、人と自然にやさしい川づくりを目指した「リバーフロント国際セミナー」を、平成5年9月3日に東京において開催した。



### 「平成5年度版河川水辺の国勢調査マニュアル(案)」刊行

建設省では、全国の1級水系及び2級水系(ダムの区間を除く)について、河川事業、河川管理を適切に推進するため、河川を環境という観点からとらえた定期的・継続的・統一的な基礎情報の収集整備を図る「河川水辺の国勢調査」を実施することとした。

本書は、「河川水辺の国勢調査」を実施するための具体的な方法をまとめたものであり、「生物調査編」「河川空間利用実態調査編」の2冊からなり、当センターからB5判で平成5年4月1日に刊行された。

### 「河川水辺の国勢調査年鑑(平成2・3年度)」刊行

建設省では、全国109の1級水系を中心に、河川を環境という視点からとらえた調査を平成2年から「河川水辺の国勢調査」として定期的、継続的そして統一的に実施して

セミナーでは、スイス連邦工科大学マーチン・ジェッジ教授などの講演のほか、東京工業大学福岡捷二助教授のコーディネートのもと生態系の保全や景観に配慮した水辺整備に関する情報交換や討論を行い、人と自然のかかわり合いについて広く意見を取り交わした。



本書は、自然との共生、水循環、水辺環境、新たな水系管理、文化と治水等からの章による構成しており、図や写真をふんだんに取り入れて、わかりやすく紹介している。



### 「河道内の樹木の伐採・植樹のためのガイドライン（案）」刊行

河道内の樹木に対するより適切な管理の実施のために、当センターでは平成元年度より「河道内等の樹木に関する検討会」を設置し、河道内の樹木群の治水上の影響に対する定量的評価手法、より適切な伐採方法、また、高水敷への植樹要請に対する適切な植樹指導等について検討を行った。

本書は、それらの成果をもとにしてとりまとめた河道内の樹木の伐採・植樹に関する技術的指針であり、建設省河川局治水課の監修のもと平成6年2月28日に刊行された。



### 「川の風景を考える

#### ～景観設計ガイドライン（護岸）～」刊行

護岸設計に携わる現場の設計担当者が、自ら実際に景観設計を行う際の手引き書としてすぐに役立つことを意図して、平成5年9月にA5版で刊行した。

本書は、原則編、基本項目編、部位編、演習編からなり、具体的な項目として、護岸の形（平面形状・横断面形状）大きさ（高さ・長さ・勾配）素材について記述している。



### 「欧州水辺空間整備調査団」派遣

南欧におけるインフラ整備とデザイン、街づくりにおける歴史的景観の保全と活用に関する調査を目的として、平成5年10月3日から10月17日までの15日間に渡り調査団を派遣した。調査団は、東京大学の篠原修教授を団長とし、建設関係団体等から総勢29名の参加を得て、バルセロナ、グランモット、マルセイユ、ジェノバ、ミラノ、ヴェネツィア、パリ等の9都市で5機関を公式訪問するとともに各地で現地視察を行った。

調査の内容は、「南欧水辺空間整備調査報告書（平成6年3月）」としてとりまとめられている。

### 「「川」-日本の水環境・文化の明日を思う」刊行

わが国の環境と文化を育ててきた川を今後とも健全に保ちつつ、後生への遺産として誇りをもって残せるような、新たな河川管理のあり方について、広範な分野の学識者からなる「水的环境・文化懇談会」（5回開催）において出された意見や議論を当センターがとりまとめ（株）山海堂から平成6年2月に刊行した。

### 「河川水辺の国勢調査年鑑」（平成3年度）を刊行

平成3年度に実施された河川水辺の国勢調査の「底生動物調査」、「植物調査」、「鳥類調査」、「両生類・爬虫類・哺乳類調査」及び「陸上昆虫类等調査」の結果を「平成3年度河川水辺の国勢調査年鑑、底生動物調査、植物調査、鳥類調査、両生類・爬虫類・ほ乳類調査、陸上昆虫类等調査編」として編集し、（株）山海堂からB5版上製本で平成6年3月31日に刊行した。

日付	記事
H5.4.1 1～8.31	リバーフロント研究所・研究第三部を新設。 「平成5年度版河川水辺の国勢調査マニュアル（案）」（河川空間利用実態調査編、生物調査編）を刊行。
1 28	「河川環境保全モニター」の設置運用に協力。 平成5年度「桜づつみモデル事業認定伝達式」に協力。
5.10	「平成2・3年度河川水辺の国勢調査年鑑・河川空間利用実態調査編」（当センター編集）を（株）山海堂から刊行。
14	水辺空間の保全整備に関する研究会「魚の目から見た河川環境（その2）」を開催。
18	平成5年度「なぎさリフレッシュ事業計画認定式」（建設省河川局主催）に協力。
25	「平成2・3年度河川水辺の国勢調査年鑑・魚介類調査編」（当センター編集）を（株）山海堂から刊行。

25	河川堤防技術研究会主催の河川生態系研究セミナー「日本の淡水魚のルーツを探る」に後援。
26	水辺空間の保全整備に関する研究会「公共空間論～水と都市をめぐって～」を開催。
6. 1	平成5年度「ふるさとの川モデル河川指定・整備計画認定式」(建設省河川局主催)に協力。
9～16	「第5回特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約締約国会議」通称第5回ラムサール条約締約国会議に、NGOの1団体として、研究第一部、研究第二部職員が参加。
14	自然豊かな川づくりに関する研究会を開催。
18	「リバーフロント研究所報告第4号」を刊行。
28	建設省建設大学校主催の平成5年度専門課程河川環境科研修会に研究第二部次長が講師として出席。
29	社団法人全日本建設技術協会主催の第334回建設技術講習会に研究第二部職員が講師として出席。
7. 8	「河川環境保全シンポジウム～人と自然にやさしい川づくり～」(建設省後援)を開催。
13	建設大臣から感謝状授受「河川整備事業推進に寄与」。
21	建設省建設大学校主催の平成5年度高等課程事業企画セミナー 科に研究第二部長が講師として出席。
8.30～9. 3	第25回国際水理学会に協力。研究第二部次長、前研究第一部長が論文発表。
9. 3	「リバーフロント国際セミナー」を東京で開催。福井県建設技術センター主催の土木技術専門(河川)強化研修会に研究第一部次長、研究第二部職員が講師として出席。
5	「川の風景を考える 景観設計ガイドライン(護岸)」を(株)山海堂から刊行。
6	「ドイツにおける多自然型川づくり」講演会を札幌で開催。
7	自然豊かな川づくり検討会「An Introduction to the United States National Water Quality Assessment (NAWQA) Program」を開催。
8	「日本とドイツの多自然型川づくりに関する意見交換会」を開催。
9	「ドイツにおける多自然型川づくり」講演会を名古屋で開催。
14	自然豊かな川づくりに関する検討会「住宅団地周辺の水辺の計画」を開催。
10. 3～17	バルセロナ・グランモット・ヴェネツィア・パリの水辺空間調査として、篠原東京大学教授を団長とする「欧州水辺空間整備調査団」を派遣。
5	建設省中部地方建設局主催の平成5年度環境技術研修会に研究第一部次長、研究第二部職員が講師として出席。
7	財団法人都市緑化技術開発機構主催の都市緑化技術研修会に研究第二部次長が講師として出席。
8	自然豊かな川づくり検討会「An Introduction to the United States National Water Quality Assessment (NAWQA) Program Part 2」を開催。
12～13	平成5年度都市河川セミナー(第8回)において研究第一部、研究第二部職員が発表。
25	河川の景観・デザインに関する研究会「色彩論について」を開催。
29	第1回新技術開発研究会「関東地方の河川の自然植生と緑化」を開催。
11. 4	人と自然にやさしい川づくり研究会「公共事業と河川事業の進め方の将来展望」を開催。
9	水野愛媛大学教授の講演会『魚の棲みよい川のかたち』を技術情報資料として編集刊行。
12	財団法人埼玉県生態系保護協会主催のシンポジウム「ピオトープ自然との共生をめざして」に研究第二部次長がパネラーとして出席。
16	河川舟運のあり方研究会「水上バスの現状と課題」を開催。
18	建設省建設大学校主催の平成5年度専門課程河川構造物設計科研修会に研究第二部次長が講師として出席。
25	河川舟運のあり方研究会「わが国における近代運河の提案」を開催。
12. 7	水辺空間の保全整備に関する研究会「Interpretation

	of River Environment Data for Management of Healthy Diverse River Systems」を開催。
9	社団法人日本土木工業協会・社団法人日本電力建設業協会主催の環境保全専門委員会第二小委員会に研究第二部次長がパネラーとして出席。
14	神奈川県土木部・都市部主催の「土木デザイン研修会」に研究第二部次長が講師として出席。
20	河川舟運のあり方研究会「埼玉県における水上交通運輸上の現状と課題」・「東京都における水上交通運輸上の現状と課題」を開催。
22	河川舟運のあり方研究会「房総水の回廊構想」を開催。
H6.1.19	河川舟運のあり方研究会「近世河川舟運の歴史的経緯」開催。
27	水辺空間の保全整備に関する研究会「地形・地質から河川をみる」を開催。
2. 1	東京大学工学部土木工学科主催の土木工学科冬学期開催講義「土木工学演習」に研究第二部次長が講師として出席。
3	人と自然にやさしい川づくり研究会「河川と環境保護」を開催。
7	建設省建設大学校主催の平成5年度専門課程河川計画科研修に研究第一部長が講師として出席。
10	「川(日本の水環境・文化の明日を想う)」を(株)山海堂から刊行。
15	「河川利用実態調査の簡略化検討会」を開催。
24	「水辺空間整備手法に関する研究会」を開催。
28	「河道内の樹木の伐採・植樹のためのガイドライン(案)」を(株)山海堂から刊行。
3. 2	水辺空間の保全整備に関する研究会「地域づくりと川づくりの二足歩-びげの川を考える」を開催。
5	東海地区水工学研究会主催の研究会「スーパー堤防の建築と技術」に研究第一部次長が講師出席。
15	「水辺空間整備手法に関する研究会」を開催。
20	「河川環境保全シンポジウム講演集」を刊行。
22	「リバーフロント国際セミナー講演集」を刊行。社団法人土質工学会主催の生態系を考慮した土構造物の計画・設計・施工に関する講習会に研究第二部次長が講師として出席。
30	河川舟運のあり方研究会「歴史から見た国土経営と河川舟運～淀川水系中心に～」を開催。
31	「河川水辺の国勢調査年鑑(底生動物調査、植物調査、鳥類調査、両生類・爬虫類・哺乳類調査、陸上昆虫類等調査編、平成3年度)」を(株)山海堂から刊行。「南欧水辺空間整備調査報告書」を刊行。「南欧写真集～水辺・街・人～」を刊行。



### 「欧州水辺空間整備調査団」派遣

ドイツ、スイス、フランスにおける近自然河川工法、街づくりにおける水辺空間の位置付けと活用方法、河川舟運などに関する調査を目的として、平成6年6月23日から7月7日までの15日間に渡り調査団を派遣した。調査団は、

京都大学の今本博健教授を団長とし、建設関係団体等から総勢33名の参加を得て、ウィーン、ニュルンベルク、ミュンヘン、チューリヒ、リヨン、パリ等の8都市で1機関を公式訪問するとともに各地で現地視察を行った。

調査の内容は、「欧州水辺空間整備調査報告書」(平成7年1月)としてとりまとめられている。

### 「河川魚類生息環境改善フォーラム」開催

魚類の遡上環境を改善し、魚の生息に望ましい環境の形成を目指して、「河川魚類生息環境改善フォーラム」を、平成6年7月15日～21日に東京、新潟、北海道の3会場で開催した。

フォーラムでは、カナダ政府の担当官からカナダにおける魚類の生息に配慮した川づくりの現状と長年にわたる優れた研究成果の講演の他、日本側のコメンテーターも参加したディスカッションを行った。



### センターの事務所移転

平成6年8月29日、エイトワンビルにあった事務所を移転し、現在の泉館三番町ビルの新事務所業務を行うこととなった。

### 「大地の川」、「天空の川」を刊行

当センターに在籍されていた関正和氏が、日本の川の歴史や新しい多自然型川づくりへの思いを綴った「大地の川 - 甦れ、日本のふるさとの川」と自らの闘病記「天空の川 - ガンに出会った河川技術者の日々」が、草思社から平成6年10月に出版された。

「大地の川 - 甦れ、日本のふるさとの川」では、NHKのラジオ番組「川の流れは国の流れ」で好評を博した内容を含め、明治以降の日本の河川行政がめざしてきたこと、海外留学時代に出会った川の印象や事例に学んだことなどが綴られ



ている。また、「天空の川 - ガンに出会った河川技術者の日々」は、同氏が建設省河川局治水課建設専門官のポストにあった平成2年、42歳にしてガンを宣告されてからの闘病記。河川技術者として、なすべきことは何かを希求して止まなかった同氏の生き方が伝わってきます。

### 「河川水辺の国勢調査(生物調査)」講演会開催

河川水辺の国勢調査(生物調査)の充実を目的とした講演会を、平成6年12月9日、東京で開催した。講演会は、全国から関係者多数の参加のもと大阪府立大学の谷田一三教授から「河川の水質指標としての底生動物 - 有効性と問題点 - 」と題し、河川水辺の国勢調査結果による水生昆虫による水質指標性の可能性と水生昆虫で測る河川の自然度についての研究成果の報告があり、次いで横浜国立大学の奥田重俊教授から「河原の植物群落(やさしい自然観察入門)」と題して河原の植物の見方や保護に対する考え方などの講演が行われた。

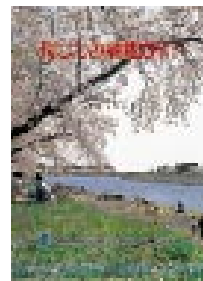
### 「河川水辺の国勢調査年鑑」(平成4年度)刊行

平成4年度に実施された河川水辺の国勢調査の「河川空間利用実態調査」、「両生類・爬虫類・哺乳類調査」、「底生動物調査」、「陸上昆虫類等調査」、「鳥類調査」、「植物調査」、「魚介類調査」の結果を「平成4年度河川水辺の国勢調査年鑑、河川利用実態調査、両生類・爬虫類・哺乳類調査、底生動物調査、陸上昆虫類等調査、鳥類調査、植物調査、魚介類調査各編」として編集し、(株)山海堂からB5判上製本で平成6年8月、11月、12月、及び平成7年1月の4回に分け刊行した。

### 「桜づつみ植栽ガイド」刊行

水辺に桜を咲かせ、地域の生活に豊かさを提供する「桜づつみモデル事業」が建設省の施策として昭和63年度から進められている。この事業を進めていく上で、現場担当者の技術的なガイドとなることを目的に、B5版の205ページの冊子として作成した。

本書は、現場からの多くの問い合わせに答える形で作成されており、桜の特性、景観性、樹種の選定、植栽形式などといった植栽計画に関す



る事項、植栽するときの土壌、植付け等施工面に関する事項、病害虫等の対策といった維持管理に関する事項等について記載している。

日付	記事
H6.4.13	人と自然にやさしい研究会「昆虫による環境のとらえかた」を開催。
18	平成6年度「桜づつみモデル事業認定伝達式」に協力。
5.18	神奈川県土木部、境川・引地川・目久尻川流域総合治水対策協議会主催の「総合治水フォーラム94」講演会に研究第二部次長が講師として出席。
6.13	「平成5年度版 河川水辺の国勢調査マニュアル(案)(生物調査編)年間原稿チェック要領」を刊行。
6.14	社団法人全日本建設技術協会主催の第348回建設技術講習会に研究第一部職員が講師として出席。
15	「リバーフロント研究所報告書第5号」を刊行。
5.23~7.7	フランス・ドイツ・オーストリア・スイスの水辺空間調査として、今本京都大学教授を団長とする「欧州水辺空間整備調査団」を派遣。
6.27	建設省建設大学校主催の平成6年度専門課程河川環境科研修に研究第一部次長、研究第二部次長が講師として出席。
29~30	富山県河川課主催の「111年「とよま川の年」記念事業多自然型川づくり研修会」に企画調査部長、研究第一部次長、研究第二部職員が講師として出席。
7.15	「河川魚類生息環境改善フォーラム」を東京で開催。
19	「河川魚類生息環境改善フォーラム」を新潟市で開催。
8.2	「第3回高規格堤防セミナー」を東京で開催。
7	竹野町主催の「美しい河川をつくる但馬フォーラム」に企画調査部長がパネラーとして出席。
29	当センターの事務所「郵便102 東京都千代田区三番町3番地8「泉館三番町」」に移転し、事務所開所式を開催。
9.6	平成6年度第1回多自然型川づくり研究会に研究第一部次長が講師として出席。
10.17~28	第10回中日河川及びダム会議に参加。
21	第2回新技術開発研究会の開催。
11.10	東京大学工学部土木工学科主催の「土木工学演習」に研究第二部次長が講師として出席。
14	岐阜県主催の自然共生型川づくりシンポジウムに研究第一部次長が講演。
30	豊田加茂広域地域づくりフォーラムに企画調査部長が講師として出席。
12.2	土木学会主催のシリーズ土木計画学ワンデイセミナー「水辺づくりの計画プロセスを考える」に研究第二部次長が講師として出席。
9	平成6年度建設技術専門研修に研究第一部次長、研究第二部次長が講師として出席。
H7.1.11	「河川水辺の国勢調査(生物調査)」講演会を東京で開催。
31	中部地方建設局主催の「多自然型川づくり・魚がのぼりやすい川づくり・河道内植樹のガイドラインについて」に研究第一部次長、研究第二部職員が講師として出席。
31	「欧州水辺空間整備調査報告書」を刊行。
31	「河川水辺の国勢調査年鑑(河川空間利用実態調査、両生類・爬虫類・哺乳類調査、底生動物調査、鳥類調査、陸上昆虫類等調査、植物調査、魚介類調査平成4年度)」を(株)山海堂から刊行。
3.1~3	「自然豊かな川づくりに関する検討会」開催。
10	川音川、ふるさとの川整備計画区域内にブロンズ像「水鳥と少年」を設置。
22	大分県竹田市主催のブロンズ像「水辺の思い出」除幕式に理事が出席。
31	「河川魚類生息環境改善フォーラム講演集」刊行。
31	「桜づつみ植栽ガイド」刊行。



### 「構築用ブロック」意匠原簿に登録される

当センターと共和コンクリート工業(株)で共同研究開発を行った、石積風修景ブロック「石涼」が7年5月意匠登録された。

近年、河川改修計画の中で修景にポイントをおいた護岸には自然石が用いられることが多いが、自然石の入手が困難になっているとともに労働者の高齢化により熟練した石工が少なくなってきた状況を踏まえ、開発が進められていた。

研究開発手法としては、既存の石積み護岸をステレオ写真撮影し、写真測量の原理から三次元形状を計測し、その解析をもとにデザインをCGシミュレーションを用いて行った。

### 「沿岸域環境デザイン研究会」開催

良好な水辺空間の創出は、河川に限らず海岸にも求められている。近年においては、自然環境に配慮した海岸づくりを望む声が多く、これを実現するための様々な取組が行われている。特に、最も良好な海岸環境に配慮した海岸保全事業等を行うための、ミティゲーションの方策について調査研究を実施してきた。

海岸整備にミティゲーションを取り入れるためには、海浜特に砂浜における物理的、生物的な過程や生態系等未だに解明されていない様々な事象を把握する必要がある。

当研究会は、これらに関する理解をより深めるために、砂浜に係わる多方面の分野の方々を講師として招き、平成7年5月より10数回にわたり実施した。

### リバーフロント整備センター岐阜分室設置

平成5年度に環境政策大綱が発表される等、豊かさを実感できるような環境づくりを目指した政策・施策の展開の方向性が総合的に示され、これからの川づくりにもその精神が生かされつつある。

川づくりは本来その河川がもつ特性及び地域の自然・社

会・文化特性と地域のニーズを的確に把握したうえで造るべきであり、そのためには現地をよく観察し、踏査することが大切である。

このような考えのもとに、日本列島の中央部に位置し、木曾三川を中心に自然豊かな環境を有した河川が多く、かつ既往調査の実績も多いこと、並びに岐阜県において「人間と自然のふれあい、自然との共生」を県政推進の基本理念として各種施策を進めていることから、岐阜市内に7月1日付けで岐阜分室を開設し、(財)ダム水源地環境整備センターと協力して人間生活と調和のとれた自然豊かな川づくりを一層進めることを目的とした「自然共生河川研究所」を設置した。



### 「魚道のはなし」刊行

魚にやさしい川づくりをめざし、堰・床止めなどの河川横断施設やその周辺の改良、魚道の新設・改善を積極的に行う「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業」が展開されており、広く河川生態系保全といった観点からそこに生息し移動している全ての魚類を対象を広げ、魚道を検討していかなければならない時代を迎えている。本書は、著者の豊橋技術科学大学教授中村俊六先生の豊富な体験と理論に裏付けされた当センターでの講演をベースに企画、刊行されたものであり、魚道の実務担当者はもとより川と魚に興味をもつ一般の読者層も念頭にして読みやすい入門書となっている。



### 「多自然研究」創刊

自然豊かな川づくりに取り組んでいる全国の研究者、研究機関、コンサルタント、行政部局、企業、川づくりに関心を有する市民等をネットワークする情報交換誌「多自然研究」を平成7年10月1日に創刊した。

本誌は毎月1回発行で、「報文」、



「オピニオン」、「事例紹介」、「ちょっと一言」などの川にまつわる多彩なコーナーから構成されており、全て会員からの投稿により成り立っている。平成9年7月現在で創刊以来22号を数え、会員数は法人412名、個人1191名にのぼる。

### 「センター技術研究発表会」開催

より良い水辺空間を創造するための技術は、日々刻々と進歩している。当センターは、このような技術の開発・調査研究を総合的に実施し、かつ、その成果を広く社会に活用して、安全で豊かな潤いのある国土建設に資する事を目的として設立された。

センター技術研究発表会は、センター職員個々の技術の向上を図ることを目的として、業務において開発あるいは調査研究された新しい技術や再度認識すべき技術等に関する成果を毎年一度発表することとし、その第1回目を平成7年10月に開催した。

### 「北の魚たちの魚道研究会」開催

国際魚道会議のため来日されたフィンランドのアン・ライネ、ティモ・ボジャー及びリタ・カムラ各先生、ノルウェーのレイダー・ギレンデ先生、カナダのクリス・カトポディス先生ら3国5名の魚道エキスパートを特別講師として招き、講演、検討委員会、関係機関の担当職員とのディスカッションを通じ、北方系の魚の魚道について最新の情報を収集し、石狩川での魚類の遡上環境改善に向け、より一層知見を深めるために平成7年10月20日札幌で開催した。

### 「人と自然にやさしい川づくり 国際シンポジウム」開催

カナダ政府水産海洋省のクリストス・カトポディス氏とドイツ・ビョルンゼン・コンサルティングのエリック・パツェ氏を迎えて、「人と自然にやさしい川づくり」と題して平成7年10月27日に東京で開催した。

シンポジウムでは、両氏による北米及びドイツにおける自然環境に配慮した川づくりの現状と長年にわたる優れた研究成果の講演の他、日本側のコメントータ





一も参加したディスカッションを行った。

### 「川の親水プランとデザイン」刊行

河川の魅力と河川・地域環境の現況を生かして、川のあ  
るべき姿に配慮した親水活動のための施設を計画するには  
どうしたらよいかを示した「川の親水プランとデザイン」  
を当センター編集により、(株)山海堂からB5版カラー  
印刷として平成7年11月5日に発  
刊した。

本書は、快適性、安全性、ラン  
ドスケープ的合理性、河川工学的  
合理性、経済性と管理の容易性な  
どの観点から、基本的考え方、計  
画の枠組み、参考事例を使った設  
計のためのヒントや、水辺事故に  
対する安全のガイドなどについてまとめている。



### 「木曾三川の伝統漁 ~人と魚の知恵くらべ~」刊行

木曾三川では、伝統的な漁法や漁具についてまとめられ  
たものがなく、また時代の変遷とともに風化、減少してい  
く伝統漁をこれ以上衰退しないうちにまとめておく必要  
性を強く感じ、また、川漁師の知恵と努力の結晶である伝統  
漁から魚の生態を解き明かし、魚が棲みやすい川としての  
条件を引き出せばとの思いから、当センターの編集で刊  
行されたのが本著である。

著者は動物生態学者で主に淡水魚の生理、生態や魚道を  
中心に研究をされている中部女子短期大学副学長(岐阜大  
学名誉教授)の和田吉弘先生であり、本著では、現時点に  
おいて解るものについては最大限網羅してまとめている。

### 「河川水辺の国勢調査年鑑 (平成5年度)」をCD-ROMで刊行

平成5年度に実施された河川水辺  
の国勢調査の「魚介類調査」、「底生  
動物調査」、「植物調査」、「鳥類調査」、  
「両生類・爬虫類・哺乳類調査」、  
「陸上昆虫類等調査」の結果を平成  
5年度河川水辺の国勢調査年鑑「魚  
介類調査、底生動物調査」、「植物調



査」、「鳥類調査、両生類・爬虫類・哺乳類調査、陸上昆虫  
類等調査」の3編に編集し、(株)山海堂より平成8年3  
月25日に刊行した。また、今回刊行分より検索性、情報活  
用有効性を考慮し、CD-ROM版型式を採用した。

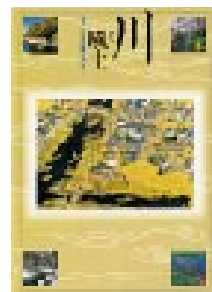
### 「川と風土」パンフレット作成

風土とは、単に土地の気候や地形などからなる自然では  
なく、自然に働きかけてきた人間の営みから生まれた自然  
環境、そしてその係わりの中で形成される人間の資質や生  
活様式などを含んだものといえる。

このような風土の観点からみた望ましい河川の姿を探る  
ために、国際文化研究センターの芳賀徹教授を座長として、  
様々な学識経験者の方々にお集まりいただき、「川と風土  
に関する懇談会」を開催した。ここでいろいろのご意見を  
頂きながら「河川像」をとりまとめた。

その結果をとりまとめたのが、  
このパンフレットであり、河川審  
議会の答申「今後の河川環境のあ  
り方について」も反映されている。

このパンフレットはA4版カラ  
ー印刷、32頁、監修は建設省河川  
局河川環境課、発行は当センター  
である。



### 「河川生態学術研究会」発足

近年、国民の自然環境あるいは生活環境に関する関心  
が高まってきている。しかしながら、河川管理におけるこれ  
らに関する知見については未だ十分ではなく、これらに対  
する情報の蓄積と学問的な理解が不可欠な状況となっており、  
平成7年度より、各分野の学識経験者、建設省からなる  
「河川生態学術研究会(委員長大島康行財団法人自然環  
境研究センター理事長)」が活動を  
開始した。

現在、河川生態学術研究会では、  
多摩川、千曲川を研究対象河川と  
し研究を行っている。

当センターは、同研究会の事務  
局を担当している。



日付	記事
H7.4.24	平成7年度河川担当者会に研究第二部次長及び職員が講師として出席。
5.12	意匠に係る物品「構築用ブロック」を意匠原簿に登録される。
16	沿岸域環境デザイン研究会「砂礫浜の地理的観点からの考察」を開催。
29	東京都建設局主催の「生態環境にやさしい川づくり」-多自然型河川工法-に、研究第二部次長が講師として出席。
6.8	修景緑化研究会主催の研究報告会に企画調査部長が講師として出席。
	沿岸域環境デザイン研究会「砂礫浜の現状とその形成過程について」を開催。
13	全国建設研修センター主催の「都市河川環境整備」に企画調査部長、研究第二部次長職員が講師として出席。
16	「リバーフロント研究所報告書第6号」を刊行。
23	建設省建設大学校主催の平成7年度専門課程河川環境科研修に研究第一部次長が講師として出席。
	「沿岸域管理の在り方とミティゲーション」を開催。
25	北九州市主催の第2回タカミヤ・マリバー環境保護シンポジウムに研究第二部次長がパネラーとして出席。
26、7.27	河川護岸工法研究会主催の「多自然型川づくり」で企画調査部長が講演。
7.1	リバーフロント整備センター岐阜分室を設置する。
5	沿岸域環境デザイン研究会「砂礫海岸の生物特性について(底生動物)」を開催。
19	宮城県主催の多自然型川づくりのための研修会に研究第二部次長、職員が講師として出席。
20	「魚道のはなし」を(株)山海堂から刊行。
28	沿岸域環境デザイン研究会「海藻の生活特性について」を開催。
28~30	「第11回水郷水都全国会議・横浜」に研究第一部職員が講師として出席。
8.29	沿岸域環境デザイン研究会「砂礫海岸の生物特性について(魚類)」を開催。
9.8~9	全国水環境交流会主催の「第3回水環境シンポジウム」に研究第二部次長が講師として出席。
11~14	中部地方建設局主催の「平成7年度環境技術研修」に研究第一部長、研究第二部職員が講師として出席。
22	沿岸域環境デザイン研究会(「ウミガメの生態と砂浜について」講師 名古屋水族館内田至館長)を開催。
28	沿岸域環境デザイン研究会(「沿岸域のデザインについて」講師 建設省海岸室 熊谷海洋開発官)を開催。
29	「河川生態環境講演会」を大阪で開催。
10.1	「多自然研究」を創刊。
5	「第1回自然共生河川研究会」を名古屋にて開催。
6	センター技術研究発表会を開催。
18	沿岸域環境デザイン研究会(「海岸の防災について(阪神大震災の報告)」講師 京都大学防災研究所 河田恵昭教授)を開催。
20	「北の魚たちのための魚道研究会」を札幌市で開催。
24~26	「第2回国際魚道会議」(岐阜市)に協賛、研究第一部職員が論文を発表。
27	「人と自然にやさしい川づくり国際シンポジウム」を東京にて開催。
11.4	鳥取工事事務所主催の「袋川in2001シンポジウム」に企画調査部長が講師として出席。
5	「川の親水プランとデザイン~これからの親水計画ガイドライン~」を(株)山海堂より刊行。
16	富山県主催の「平成7年度土木部技術職員研修」に審議役、研究第二部職員が講師として出席。
16	(社)建設コンサルタント協会主催の「第4回河川講習会」に研究第二部次長が講師として出席。
22	沼津工事事務所主催の「第五期富士・伊豆地域文化塾」に研究第二部次長が講師として出席。

28	岐阜県地方大学主催の「若手プランナー育成講座に係わる現地調査の実施」について研究第一部職員、研究第二部職員が講師として出席。
12.4	沿岸域環境デザイン研究会(「我が国の風土と砂浜について」講師 筑波大学 歴史・人類学系高桑守教授)を開催。
10	「木曾三川の伝統漁~人と魚の知恵くらべ~」(著者 和田吉弘氏)を(株)山海堂より刊行。
13	岐阜県主催の「自然共生型川づくりシンポジウム」に後援及び研究第二部職員が「すぐに役立つ模型づくり」(多自然型川づくり河道模型制作の手法について)を講演。
14	沿岸域環境デザイン研究会(「砂浜と海岸植生について」講師 千葉県立中央博物館 大場達之前副館長)を開催。
H8.1.9	沿岸域環境デザイン研究会(「海岸が健康に及ぼす影響について」講師 東京学芸大学波多野義郎教授)を開催。
24	(財)自然環境研究センター主催の講演会に研究第二部次長が講師として出席。
30	建設大学主催の「リバーフロント計画の展望」について研究第一部長が講師として出席。
2.1~3.31	東京工業大学において研究第二部次長が非常勤講師として出講。
1	東京都主催の平成7年度職能(共同)研修に「河川・橋梁」についてリバーフロント研究所長が講師として出席。
6	東京都主催の平成7年度職能(共同)研修に「河川の景観」について研究第二部次長が講師として出席。
14	「第2回自然共生河川研究会」を名古屋で開催。
3.22	堺市主催の「ブロンズ像春の思い出」除幕式に理事が出席。
25	「平成5年度河川水辺の国勢調査年鑑」をCD-ROMとして(株)山海堂より刊行。
30	「川と風土」パンフレット作成。



### 「川の生物図典」「フィールド総合図鑑」刊行

川で暮らす生き物を見る。人間も生き物、自然の一員ということを再認識する。川を守り、創り、後世に残していく。その意味で多自然型川づくりの担う役割は非常に重要であり、こうした中、川づくりの現場では、河川工学はもとより、他に生物の生態に関する様々な知識が必要となっている。

本書は、河川環境(河川形態や水環境)と生物の生態・生活史との係わりに焦点を置き、河



川に係わる技術者が、川で見られる生物に関する知識を習得できる資料をめざすとともに、川を愛し、川に関心のある人達が川の自然に対する理解や愛情を更に深める一助となることを願って、平成8年4月、当センター編集で、多くの学識者、研究者、自然愛好家のご協力をいただき刊行された。



### 台湾省「河川環境行政」研修

平成8年4月1日から25日までの約1ヶ月間、台湾省水利局主任秘書吳祖揚氏を団長とする水利局、水土保持局、曾文ダム管理局、水道公司、建設庁、台北水源特定区管理委員会の22名を当センターで受け入れ、研修を行った。研修内容は、河川行政一般から利水、治水、砂防、林野、環境と多岐にわたるものであった。講義による研修の他に、7日間の現地視察意見交換等を行った。



4月にA5版で刊行した。

本書では、ねらいであるちょっとした配慮・工夫に対して、できるだけ多くの事例写真で対応させている。

### 台湾省への河川行政についての講師派遣

台湾省水利局から「集水地域の経営管理のための外国の専門家および学者招請」の依頼を受け、岐阜大学河村三郎名誉教授と当センターの中村・安田両次長が8日間の日程で訪台した。セミナーを2回開催して日本での河川総合開発計画や高規格堤防事業、多自然型川づくりの実際等を講演したほか、現地視察をして意見交換を行い、河川行政等について有意義な話し合いを行なった。

### 「人と自然にやさしい川づくり国際シンポジウム」開催

アメリカ・オレゴン州立大学ピーター・C・クリンジマン教授を迎えて、「人と自然にやさしい川づくり」と題して、平成8年5月17日に東京で開催した。

シンポジウムでは、クリンジマン教授による「合衆国太平洋岸北西部における河川工学に関する環境問題の動向」と題した講演のほか、東京大学玉井信行教授、愛媛大学水野信彦名誉教授、建設省土木研究所島谷幸宏河川環境研究室長を交えたディスカッションを行った。

### 「多自然型川づくりステップアップセミナー」開催

多自然型川づくりステップセミナーは、多自然型川づくりのより一層の推進に寄与することを目的に、建設コンサルタントの中堅実務者を対象に平成8年4月17日、東京で開催した。

今後の川づくりの動向や多自然型川づくりの計画、設計等の注意点、ポイントなどについて、具体例をおりまぜながら発表が行われた。また、事例発表では実際の多自然型川づくりの計画、設計事例をもとに、改善点や問題点について討議が行われた。

### 「川の風景を考える～景観設計のためのガイドライン(水門・樋門)～」刊行

一般的な水門、樋門の景観設計において、問題意識を持った設計者にとって参考になるような、ちょっとした配慮・工夫を、なぜそのような配慮が必要なのか、何を目的しての配慮・工夫なのかをわかりやすく示すことをねらって、平成8年



### 「荒川将来像計画」刊行

首都圏の中央を貫流する荒川は、地域の社会経済文化等と深いかわりを持っている。広大な水辺空間は、安全と利用と自然環境保全の葛藤下であり、新しい荒川の将来像を明らかにして、今後の川づくりの方向性を求める必要があった。

本書は荒川下流域の沿川2市7区と建設省荒川下流工事事務所が「荒川の将来を考える協議会」を設け、検討した結果をとりまとめたものである。全体構想書と9冊の地区計画書から成っており、監修は「荒川の将来を考える協議会」編集・発行は(財)リバーフロント整備センターで、平成8年6月1日刊行された。

### 「多自然型川づくりの取組みとポイント - まちと水辺に豊かな自然を」刊行

多自然型川づくりの取組みは全国に急速に広がってきているが、川づくりの現場での悩みや問題も従来以上に多く

なってきた。川にはそれぞれ個性があるので多自然型川づくりには画一的なマニュアルや手法はあてはまらない。多自然型川づくりをよりの確に実施するためには関係者一人一人が多自然型川づくりとは何かをしっかり認識して川づくりのポイントや留意点を知る必要がある。



このような問題意識をもとに「多自然型川づくりの取組みとポイント」をテーマに、「まちと水辺に豊かな自然を」シリーズ第3弾を当センター編集、(株)山海堂からA5版カラー印刷として平成8年7月10日に発刊した。

本書は豊富な事例を使い、多自然型川づくりの考え方、計画、設計などのポイント、注意事項などを具体的に紹介している。

#### 「人と自然にやさしい川づくりセミナー」開催

近年注目されてきた新しい手法であるIFIMについて、様々な方々に理解してもらうため「人と自然にやさしい川づくりセミナー～IFIMへの招待」と題し、平成8年11月1日東京で開催した。IFIMを開発した研究グループの一人であるアメリカ合衆国地質調査所生物研究部のテリー・ワドゥル博士を講師に招き、同博士の長年にわたる研究報告や貴重な提言をいただくことが出来た。後半では、豊橋技術科学大学中村俊六教授をコーディネーターに、新潟大学大熊孝教授、愛媛大学水野信彦名誉教授、建設省土木研究所島谷幸宏河川環境研究室長、ニフティーサーブ「川のフォーラム」幸野敏治システムオペレーターを交えてパネルディスカッションが行われた。



#### 「魚道及び降下対策の知識と設計」刊行

本書は、現役フランスにおける世界的に著名な魚道の専門家たちによって書かれた魚道と降下魚対策の本の日本語翻訳版である。当センターが海外の魚道に関する調査・研究業務の中で収集した資料の中から、日本の魚道整備に役立つものとして翻訳・編集したものであり、163mm×238mm判、カラー印刷として当センターから刊行した。

内容としては、魚道に係わる最近の情報を技術的ガイドラインとして明らかにすると共に、魚道の効率的な管理、降下回遊の問題等についても詳しく取り上げている。

なお、翻訳にあたっては、原著者の意図の忠実な再現のため、豊橋技術科学大学の中村俊六先生と東信行先生に監修をお願いした。



#### 「河川水辺の国勢調査年鑑(平成6年度)」をCD-ROMで刊行

平成6年度に実施された河川水辺の国勢調査の成果を広く公開し、一般の利用に供すべく、「魚介類調査・底生動物調査編」「植物調査編」「鳥類調査、両生類・爬虫類、哺乳類調査、陸上昆虫類等調査編」の3編構成として、建設省河川局河川環境課監修、当センター編集により、平成9年2月10日(株)山海堂からCD-ROM版として刊行した。

本書では現地調査結果に加え、既往の文献調査結果も合わせて記載した。また、CD-ROM版の特性を活かし、各種データの検索や複写機能および主な確認種の写真も組み込まれている。

日付	記事
H8.4.1 1～7.31	「川の生物図鑑」を(株)山海堂より刊行。中央大学において研究第二部次長が非常勤講師として出講。
1～25	台湾省水利局員等22名が「日本の河川行政」等について当センターへ研修のため来日。
17	「多自然型川づくりステップアップセミナー」を東京にて開催。
20	「フィールド総合図鑑～川の生物」を(株)山海堂より刊行。
20	「川の風景を考える～景観設計のためのガイド(水門、樋門)」を(株)山海堂より刊行。
5.8～15	台湾省へ研究第一部次長、研究第二部次長を講師として派遣。
16	当センター会議室において「多自然型川づくり研究会」開催。
17	「人と自然にやさしい川づくり 国際シンポジウム」を東京で開催。
6.1	荒川将来像計画、刊行。
7	第9回大分県内水面漁業振興フォーラムに研究第一部長が講演。
20	「リバーフロント研究所報告第7号」を刊行。
7.1～31	平成8年度「河川愛護月間」及び「海岸愛護月間」に協賛。
3	沿岸域環境デザイン研究会(「フロリダ州における砂

	<p>「浜海岸の管理」講師 九州大学工学部 小島治幸教授、「アメリカにおけるミティゲーションの制度と適用例」講師 東京大学工学部 磯部雅彦教授)を開催。</p> <p>「まちと水辺に豊かな自然を ~多自然型川づくりの取組とポイント」を(株)山海堂より刊行。</p> <p>22 建築学会水景小委員会に「親水プランとデザイン」について、業務部長が講師として出席。</p> <p>22 「多自然型川づくりの取組とポイント」について研究会を開催。</p> <p>9.5 中部地方建設局主催の「平成8年度環境技術研修」に研究第一部、研究第二部職員が講師として出席</p> <p>10 第2回「河川勉強会」を開催(名古屋)</p> <p>10.26 全国建設研修センター主催の平成8年度「市町村河川改修」にリバーフロント研究所長が講師として主席</p> <p>11.1 「人と自然にやさしい川づくりセミナー~ I F I Mへの招待」を東京で開催</p> <p>21 第3回「河川勉強会」を名古屋にて開催</p> <p>12.1 「魚道及び降下対策の知識と設計」刊行</p> <p>5 第4回「自然共生河川研究会」を名古屋にて開催</p> <p>H9.1.1 「河川水辺の国勢調査年鑑(平成6年度)CD-ROM」を(株)山海堂より刊行</p> <p>22 埼玉県川越土木主催「21世紀に向けた水辺空間づくり」に企画調査部職員が講師として出席</p> <p>29 第4回「河川勉強会」を名古屋にて開催</p> <p>2.3 建設省建設大学校主催の平成8年度「専門課程河川計画科研修」に研究第一部長が講師として出席</p> <p>3.1 「川の模型の作り方」を(株)山海堂より刊行</p> <p>9 豊田加茂広域市町村圏事務処理組合主催の「豊田加茂地域づくりフォーラム」に理事長が講師として出席</p> <p>13 岐阜県漁業共同組合主催「内水面知識普及講演会」に専務理事が講師として出席</p> <p>19 モニュメント「翠光すいこう」を恵庭市に寄附</p> <p>19 時計塔「時の流れ」を長崎市に寄附</p>
--	--

本書は、廉価で、どこにでも手に入る材料を使い、初心者でも手軽に模型を作れるよう、編集されており、カラー写真を多用する事で、わかりやすくするなどの工夫が施されている。内容はB5版191頁。

### 「ドイツにおける自然に適合した河川工法」講演会開催

平成9年6月12日と16日の両日、東京と大阪において、「ドイツにおける自然に適合した河川工法講演会」を開催した。

この講演会は、ドイツのバーテンヴェルテンベルク州環境省河川工事ハンドブック第5巻「自然に適合した工法 - 河岸及び川岸斜面の保護」を当センター監修で翻訳発行することに併せて計画され、同州政府で実務に携わられているゲルト・クライバー氏により同州において自然に適合した工法を行うに至った経緯、計画設計にあたっての基本的な考え方などについて講演をいただいた。

### 「欧州エコロジカル・ネットワーク調査団」派遣

ドイツ、オランダの河川、都市、農村におけるピオトープ整備と自然保護、これらに基づくエコロジカルネットワークの概念と現地適用状況の調査を目的に、(財)日本生態系協会との共同事業として平成9年7月7日から7月19日までの13日間に渡り、調査団を派遣した。調査団は、(財)日本生態系協会の堂本泰章理事を団長とし、建設関係団体等から総勢35名の参加を得て、ランダウ、バンベルク、カールスルーエ、ワーゲニンゲン、リリースタッド、ハンブルクの6都市で6機関を公式訪問し、担当者からレクチャーを受けた後、各地で現地視察を行った。



### 「多自然型川づくりに役立つ川の模型の作り方」刊行

自然環境の保全・再生を目指す多自然型川づくりを行う際に、最近では河川技術者だけでなく、生物学者や地域住民までも含めた議論がなされるケースが増えている。そういった際、意志疎通を可能にし、イメージを共有するための川の模型の作り方をわかりやすく解説した「多自然型川づくりに役立つ川の模型の作り方」を平成9年5月15日に発刊した。

